

## 語りの展開

神話から発したとされる昔話の語りは、室町、戦国時代を境に大きく変化する。本稿は、さらに江戸時代以降、現代までどのように変容したのかを中心に見てみる。昔話は江戸時代になり、貞享・元禄時代に子どもの小遣いで買える安価な赤本（表紙を赤く塗って目に付きやすくした）から、青本・黒本となって普及し、しかも鎖国政策で海外のものは禁止されたため、京・江戸から離れた諸国はなしが流行し、さらにパロディ化して広がっていく。また、芸能も地方の城下町へ広がり大道芸となっていく。庶民化が進み、「平家語り」が流行するが、その語りの弟子どもが若者向けに一気に語った「さかさま物語」たる「早物語」も流行する。昔話は寺子屋で字を習った子どもが大きな声で読んで聞かせたりもしていたが、明治になって小学校国語読本に入り込み、やがて二葉亭四迷などによる文学の潮流などの影響もあってか、「読む昔話」になり、さらには国語読本から新たに昔話の歌も生まれるようになっていった。

武田 正

## 1 赤本からパロディ化時代

『嬉遊笑覧』<sup>①</sup>の「ぢぢばの物語」にこう記されている。

『異制庭訓』に祖父母之物語とあるは「一休ばなし」序文に、祖父と祖母との咄よりしらぬ我なればかしまりたりと申せども、山へせんたく川へ柴刈りにと申ければ、古めかしのはなしやと云々。今も小児のすなる昔々の咄はげに古きものと聞ゆ、猿の尻は真つ赤なといふこと昔より彼を赤きものにわらふ、『新猿楽記』に十三の娘の条、著経猶猿尻、また『犬筑波集』にさるの尻こからししらぬ紅葉かなと見え、また「狸が火傷の咄」は『古事記』の素鬼の故事に似たり

「瓜姫」「桃太郎」「隠れ蓑・隠れ笠」「舌きり雀」「羅生門鬼」「花咲せ爺」の名も見えていて、家々の囲炉裏端で語られていたことは十分想定できようということである。しかも「山へせんたく川へ柴刈り」といって、語り手のいい草を聞き手が冷やかし気味に

言つて戸惑わせる様子が、そこに伺える。地方の城下町米沢に、天保十二年（一八四一）の序文のある、文人武士吉田糠山綱富の著『童子百物かたり』<sup>②</sup>が上巻のみ残されており、全く同じ場面が描かれている。

おぢぢ様、むかしむかしという。ヲヲとて、むかしむかしぢぢは山へといへば、イヤイヤそんなハ古い古い、今ハぢぢハ川原へ、ばばハ山へ柴切りにと、今とむかしのひっくり返りたる事の時世なれと、こまつておれば、狐むかしをといふ。（中略）  
むかし毫もぢぢばにはたりたるむくひ来りて、今孫ら彦らにはたらるる。

天保のこの頃には、田舎の城下町でさえ、昔話はこのように行き渡り、子どもの楽しみとなっていたのである。

昔話がこのように子どもの世界に入つて広がりを見せるようになった契機の一つには、延宝（一六七三〜八一）の頃から現れるようになった、子どものための絵本たる「赤本」<sup>③</sup>があつたことは、否めない事実であろう。これにはこんな事情があつたといわれている。

江戸時代になり、徳川の世を絶対なものにするにあたり、三代將軍徳川家光は参勤交代の制度を作り上げる。江戸城に参内して一年、次の年には国に帰り、その次の年にはまた江戸城詰めになるという制度である。江戸に来るとき、また江戸から帰るときには、その大名の石高に応じて、大名行列の規模が決められており、各藩の消費は莫大な物であつた。始まつたのは寛永十二年（一六三五）のこと

である。これによつて相対的に徳川家は絶大な力を持つことになつたといつてよいだろう。さらにそれから四年ほどして寛永十六年には鎖国政策をとることになる。表向きには戦国時代に入つて来たキリシタンが、日本を植民地化しようとする意図をもつていたという噂から、キリシタン排斥<sup>④</sup>ということであつたが、実は仏教による宗教政策での統一ということであり、それまで一向宗をはじめとする勢力に悩まされていたものを幕府の統治下に置くように強制したものであつた。合わせて藩が独自に他国と貿易をすることを禁止し、経済を幕府の支配下におくことでもあつたといえよう。

そのこともあつて、各藩の財政は逼迫することとなり、それまで藩が抱えていた襖絵の絵師や芸人を解雇せざるを得なくなつたのだつた。大名や社寺の保護を断られた彼等は各自の生き方を考えざるを得なくなつた。新しい場で生きるために、絵師は浮世絵師としての道を歩み出したり、芸人は田舎まわりをせざるを得なくなり、文人もまた江戸・大坂・京都の町人階級をターゲットにした、新しい作品を考えざるを得なくなつたといえる。珍しいテーマや材をもとめることになるが、その最たるものは外国物であつたらうが、それは鎖国政策に触れることでもあつたから、仕方なしに文化中央から遠い、僻遠の地から話題を集めての「諸国物語」が流行することになる。西鶴の『諸国はなし』<sup>⑤</sup>などは出色の作品であつたといえよう。

だがそれも長続きはしなかつた。怪奇談に興味が移り、いわゆる百物語が流行し、そうした本の題名だけでなく、怪談を語り合う会も、文人の間に流行し、やがて若者たちの世界にも広がるようになった。怪奇談を語つたあとに、寺の裏手の墓地などで、暗くなつ

てから、肝試しもくわえて行われた。怪奇作家上田秋成を生むことになったし、道ならぬ心中物の近松門左衛門、商業都市大坂を舞台にして、やがて新しい商人道を描いた井原西鶴を生むことにもつながった。

そして、やがて子どもをターゲットにした「赤本」が生まれ、大ブームをもたらすことになる。浮世絵が流行し絵師に弟子に入る者が多く見られるようになるが、まだ一人前の浮世絵師になる前の弟子どもと、出版元が手を結んで、子どもの小遣いでも手に入る安価な絵本が、少なくとも宝永年間（一七〇四〜一一）には、本屋に並ぶことになった。目に付くように表紙を真っ赤に塗ったから「赤本」と呼ばれるようになった。赤本は大人のための「奈良絵本」に始まるというが、その後には「赤小本」も生まれ、その全盛時代を迎えることになった。

なんといっても、室町時代以来、囲炉裏端で耳にし、親しみを憶えていた昔話であったこと、さらに子どもでも買える安価さが、流行のきざしを作ったことは否めない。江戸時代、誰でもが知ることになった、俗に言う「五大昔話」としての「桃太郎」「さるかに」「花咲爺」「舌切り雀」「かちかち山」は、赤本の、格好の昔話であった。赤本の評判は囲炉裏端での昔語りよりも、盛況を呈した向きさえあったという。子どもにとってはなじみの昔話でもあったから、その新しい鑑賞の形式を生み出したのが、絵本としての「赤本」であったといえる。語りそのものが、初期には絵の余白にびっしり書かれていたが、やがて、子どもたちが良く知っている昔話でもあったから、次第に字は会話の部分を中心になって、ますます子どもの想像力を高めることになったと見てよいだろう。ここまで来ると、

神話や仏教説話の影響を受けながら出発し、神話・仏教説話についている〈信仰〉はすべて剥ぎ取られ、モチーフ、話型のおもしろさが前面に出て、昔話の世界がより明確に表現されるようになったといえよう。

見る子どもは絵の方に見入ってしまい、それに教訓を盛り込もうとした作者の意図が生かされない恨みもあったようである。

赤本について、喜田川守貞は『近世風俗志』<sup>⑥</sup>にこう記している。

余幼少の頃は、赤本・黒本とて、表紙赤と黒とありて、表題を黄紙に記し、頼光四天王そのほか、武者絵に少しの詞書ありしなり。後に黄表紙になりて、花咲爺、舌切り雀、狸兎土舟等の昔話に、勸善懲惡の文を加え、童の玩とせしに、それより、京伝、馬琴、一九、三馬、鬼武など言う作者、種々の作意を草本より合本に顕し、画も豊国、北斎、重信など、巻を尽くし、連年出版すること夥しく、中には女童の悟り得がたき歌書・漢文を取り交じえ、愛情を含みすぎ、艶本に均しく、画も歳々の流行の風俗ゆへ、なまめきたる手本に似たり。悪は罰し、善は幸いすることに見る人心を止めず、ただ愛情と画の風俗のみに心を止めて、下賤のいらざる言句を覚え、ただ永日の退屈を省くばかりにて、詮なきことぞありける、云々。

そして正徳・享保のころの赤本は紙五枚を綴じ、後に青本も出たという。そして代銭は六文で売ったとある。その後は「年々奇を争ひ」とあって、山東京伝などによって変わってきたとあるから、赤

本も一つの転機を迎えていたのだろう。一つは売れた物として敵討ちなどは、一冊で終わらずに、続編が次々に出されたり、表紙に錦絵を切り抜いて貼ったりして、さまざまに変化しはじめたようである。

興味深く思うのは、赤本の値段がはじめは六文だったのが、趣向をこらして享和の頃になって、十文にもなったとあることで、当時の大人向きの本の値段はどのくらいであったのだろうか。

## 2 パロディの時代

文化・文政の頃のパロディ流行の先駆ともいえる柳亭種彦の『偽紫田舎源氏』<sup>⑦</sup>は背表紙に紋染紙が使われ、絵が入り、豊国の描いた物で当代随一の浮世絵師でもあったろうが、百二十四文であったというから、逆に赤本がいかに安価であったかも分かるうということである。

享保から元文年間（一七三六～四一）に活躍した浮世絵師である、西村重信の描いた赤本『再版桃太郎昔話』がある。「再版」とあるから、前の赤本もあるのだろうが、未見なので何ともいえないが、冒頭の場面に、陣羽織風の着物の子、坊主頭の子、笹の葉ちらしの子、渦巻き模様の着物の子の四人が登場して、こんな会話から始まる。

「昔々あったとき、爺は山へ草刈りに」

「桃太郎はおもしろい」

「そのあとで、兎の手柄を聞きたい」

「黙って聞け」

とあり、「桃太郎」の話になる。桃太郎が人気の昔話であったことが分かると同時に、他の昔話をも含めて、昔話が子どもの世界にすでに定着していたことが、十分理解できるだろう。そしてまた明確とは必ずしもいえないが、囲炉裏端での語りだけでなく、子どもたちだけの語り合いの場での昔話語りが登場していたことが想定されるといえない。

赤本の作者の側からも、絵本としての昔話の時代になって変化が現れはじめている。山東京伝による『桃太郎金太郎雛鶴湯の寿』<sup>⑧</sup>の出現が見られる。戯作者で、本屋を兼ねていた山東京伝は、この赤本で、桃太郎と鉢かづき姫が結ばれて、その間に生まれたのが金太郎であったというのである。しかもこの本は極めて高価なものであったらしく、これを手にすることによって、この時代に最も怖れられた疱瘡に罹らず、罹っても軽くすむという本だとして、大変な評判を呼んだというから、子どもにも買って与えることも多くあったのだろう。モチーフや話型を大幅に改めた作品化は、多分に江戸時代末期になって、古典のパロディ化が前述したように、柳亭種彦による『源氏物語』のパロディとしての『偽紫田舎源氏』に見られるように、この時代思潮を巧みに取り入れて、昔話をも改編して出上がった物があったといえる。伝承といったことにこだわらず、改編したものであったのだろう。

赤本の時代がひとまず終わりを迎えるが、赤本ほどの評判にはならなかったとはいえ、昔話絵本の要求は続く。幕末期の文化・文政年間を迎えて、再び庶民化の高まりの中で、赤本の再刊が出版され

続け、黒本・青本などとして登場し、明治時代になっても、昔話絵本は相変わらず続き、今日まで見られるのである。

### 3 語りの者の横行

江戸元禄時代は庶民文化の大きな転換期であった。室町時代から戦国時代にかけて、社会は大きく変わったが、元禄時代に入って、一つの安定期を迎えたといつてよいだろう。それは徳川家が絶大な力で諸大名の上に君臨することになったからで、それは参勤交代制によって明確化したことが一つだが、さらに鎖国政策が功を奏して、国内的には平穏な時代になったからで、そうした中で武家文化の中に庶民文化が割って入り込むことができるようになったのである。中でも、室町時代までは京都の公家や寺社に雇われていた芸人たちが、表向きには解放されて、地方を回ること生計を維持するようになったのである。というのも、公家や上流武士階級、寺社が幕府の政策で、経済・財政的に窮迫してきたこともあって、芸人たちを保護する余力がなくなり、芸人は京や大坂を離れて、村々を歩くことで、食べてゆくことを余儀なくされたのである。今になっては古典芸能と考えられるようになった「能・狂言」<sup>⑨</sup>、さらには寺社を中心に広がった説経節なども、村々を歩く大道芸に移行せざるを得なくなったといえる。

そうした様相を見せてくれる一冊の本が元禄時代にできたという『人倫訓蒙図彙』<sup>⑩</sup>である。元禄時代にまとめられたということ、室町時代から戦国時代、そして江戸時代の最も初期の雑芸をまとめた物といえる。すでに大きな転換期を迎えているという前兆が、

そこには見られるといつてよいだろう。

新しい職業として、占い師などが諸国を歩き、物売りが触れ売りの声を上げるようになったのだが、特に目立つようになったのは、商人の積極的な活動である。たとえば質屋が現れて、金を貸すといった極めて都市的な商売が見られるようになり、大坂だけでも四十五軒を数えたという。このほかにも古手屋が絹布・木綿など、足袋や帯まで、質流れを買い集め、それを売るといった商売も生まれてきている。「小間物屋」といった子ども相手の細工物を売るような店も現れてくるようになり、特に本屋が板に字を彫って木板本も作られるようになった。生活に直結した「箸師」とか、「縫針師」などは当然のものといつてよいが、生活に直結するというよりは、むしろ遊びに近い「歌留多師」「賽師」なども、一つの商売として成立するようになったのである。「団扇師」「造花師」などさえ見られるようになった。「鋤鋤柄師」など、鍛冶屋と組んでの仕事で、木の部分と鉄の部分の分業化・協業化が見られるようになったのである。

芸人についてみると、寺院建立の善根として浄財を集めるのは、古い習俗ではあったが、それにあやかつて、「針供養」「庚申代待ち」をはじめ、「門説経」「腕香」など、むしろ曲芸とでもいうものが現れ、中には詐欺同然のものも現れるようになった。「箸供養」については、こうある。

かれがしかけ針のくやう(くよう)にひとしく年中の箸の恩徳を報ぜざれば、地獄に落ちる也。とつと古風のときは信仰したる者多かるべし。今されたる憂世にさへ片辺土には、だまされる

ばこそ根からたゆる事はなし

平和になった証しというのであろうか。「歌念仏」あり、「事触れ」などは愚夫愚婦をたぶらかしの吉凶占いであったらしい。「口寄せ巫女」も目当ての家々を回ったのであろう。

中でも、興味を引かれるのは、「猿若」という芸人で、一人狂言を持ち歩いた芸人である。本来能と狂言とはセットになって演じられる物である。しかしこの時代になって、大道芸となり、猿を連れて狂言のさわりを大道で演じた上、猿回しも兼ねていたのであろうか。

また「祭文」<sup>⑩</sup>について、「神道かと思えば仏道、とかく其本拠さだかならず」というから、本来は神社の祭文であったものが、もうこの時期には完全に芸になって、やがて芝居小屋に入り込み、ホラ貝と錫杖を伴奏の用具として、各地の祭りを追って、『天明曾我』を語り歩いた者である。

#### 4 早物語

雑芸の一つに座頭の芸としてあった「平家語り」もあった。『人倫訓蒙図彙』<sup>⑪</sup>には、

行長平家物語作教へしは、生仏といふ座頭なり。誠に高位にまじわるものなれば、心直にありたきもの也。聞伝へしは逢坂の蟬丸又は景清日向こうとうをいひしとかや。初官より段々の宮あり、石塔二月十六日、涼み六月十九日なり。検校入用凡四拾

貫目余なり

という。行長が生仏に「平家語り」を作って与えたというのは、『徒然草』に記されていることで、俗説に過ぎないともいわれているが、それはそれとして、東北地方では南部藩、仙台藩では「平家語り」は座頭の芸<sup>⑫</sup>で、座頭の特権として認められていたらしい。そこに江戸から浄瑠璃が入り、これも座頭の芸として、検校の権限で演ずる事が許可されていたようである。藩主の保護があったから、弟子もかなりおったという。

座頭の弟子どもは、師匠の「平家語り」や浄瑠璃の前座に「早物語」などを語って客を喜ばせたいらしい。早物語には昔話の形式譚の一つでもある「長い名の子」などがあり、それをすらすらと語り演じることで喜ばれたようである。江戸時代にすでに「ジュゲム」として落語に横滑りするが、早物語は若者たちの年齢層の昔話といってよいものであった。中でも「逆さ物語（さかさものがたり）」は座頭や祭文語りの前座には、なくてはならないものになった。これを「てんぼ・逆・嘘」物語とも呼んでいた。嘘で固めた物語を特別な節も無しに早口で一氣に語るもので、若者たちには昔話として喜ばれたものであった。

早物語<sup>⑬</sup>は特別の抑揚なしに、早口で語るもので、初めの句「それ物語り候」、結びの句としては「……の物語」「……の物語、ほほう敬つての物語」をもっているが、中身は観客に合わせて、昔話やわらべうたや語り物まで吸収して語りの中に入れてしまい、当時の若者には評判であった。

そうりやもの語り、語り候。

天保元年閏七月、中、茶釜の年、近江にみずうみさ火が付いて、ざんぶごんぶと焼けにけり。目蔵(盲目)が見付け、がんば聞きつけ、いじりは走り、手んぼうは招き、街道を笠にかぶって、六尺棒を鉢巻きして、三尺手ぬぐいを杖につき、笠の上を天下りにくだりますると、みみずの骨、頭の先から踵筋まで、ぶつ通たんの物語。

さてそれに付ける葉、何が良かろうと聞いたれば、畑の雑魚、川のふくだち手さつけて、一昨日の朝間みだでは、すてんてんと取ったんの物語。嘘てんぼの物語。余って候。

(『櫛引村史』)

こうしたてんば(嘘) 物語が若者たちのころを捉えたらしい。

中世に大変な評判だった「説経節」の仏教臭さはこの時代になって聞く者が減り、今の社会を写す事件を材にした自由な節回しで演ずる浄瑠璃が喜ばれるようになり、節回しを工夫して、竹本義太夫が一世を風靡するのに伍して、各地方で独自の節回しが生まれ、声を誇る歌い手も続出することになる。中でも東北地方を渡り歩いた座頭の「奥浄瑠璃」は東北地方の独特のものであり、弟子どもがその前座に演ずる早物語も工夫されて、歌とともに昔話ともしれぬセリフを早口で唱える芸が広がることになったことから、童歌・昔話との境界をなくしてしまったのだろう。

青森県には、「ハイハラリンの物語」と呼ばれる早物語がある。「ハイハイ物語」とも呼んでいる。

昨夜生まれた太郎は

米嚙みたい 米嚙みたい

米嚙みながら田を作れ

田を作れば泥が付く

泥が付けば川さはいれ

川に入れば流れる

流されたらヨシさどっつけ

ヨシさどっつけば手が切れる

手が切れたら麦ウルシをつける

麦ウルシを付ければ蠅たかる

ハイハイの物語候

(青森県 山崎清一郎)

早物語には昔話から作ったと思われるものも見あたる。多分に早物語を楽しむ人たちにはそれまで昔話語りに親しんできた若者も多いことだろうから、そんな早物語が出ると喜んで聞き入った者が多かっただろう。たとえば、昔話「田螺と鳥」(大成四四)である。そのモチーフは次のようなものである。

1 鳥が田螺を見つけてくわえる。

2 田螺が鳥の鳴き声をほめる。

3 鳥は鳴いた拍子に田螺を落とす。

4 田螺は穴に逃げ込む。

それを早物語では、こう語って客を笑わせる。

そうれ物語り語り候。語るはもつての物語。

江戸は浅草前のことなれば、奇妙不思議だ町人一人来たらせ給う。田螺このよし未来を願う。天が下を飛び回る鴉九郎左衛門に踏みつけられ、そこで田螺市は波一重、ゴミ一重ぬるりさつとう、這みついて申すよう。天が下を飛び回る鴉九郎左衛門殿、御身はそれほど美しく、賤しげな者を侮蔑すなや。御身の姿を見てやれば、所化の衣にさも似たり。またおつぶりさまの結構さまと申するは縷子の頭巾にさも似たり。コカンコカンおっしゃる声は鶯の春の巻唱える声にもさも似たり。それほど御身は美しくても賤しげ者を侮蔑すなや。飴かでんちゅ砂糖菓子か、くしくし柿か申柿か、なんと騙されて、そこで鴉九郎左衛門、今日は親父の命日でもあるうと、雲を遙かに飛び上がる。そこで田螺市は波一重、ゴミ一重、ぬるりさつとう這みつけて申すよう。それほどわが身が美しいと思うかや、阿呆鳥の馬鹿鴉、からてつつぶりなど、めぐさきこと、山に立つたる焼け切り株。またコカンコカンとふぬかす声は、道ばたの蛙駒に蹴つ飛ばされて、くたばる時の声にさも似たり。また五体つきなども一七、八年経つたる金火箸の打ち折れたるにもさも似たり。そこで鴉九郎左衛門、ドングリごとや酸漿ごとの血の涙、どつたりどつたり落として飛んだの物語り。

(山形県 佐藤陸三)

早物語はすでに室町時代、奈良の興福寺の記録『経覚私要鈔』に記されている。それは童歌や昔話に吸収されて伝承されてきたと考えられていたが、あるいは逆に、わらべうたや昔話が早物語になっ

たということかもしれない。とはいえ、早物語・わらべうた・昔話がほぼ同次元で楽しまれてきたことだけは確かなことであろう。すでに指摘したことだが「長い名の子」がそれである。早物語のその後を見ると、明治の自由民権運動の中で歌われた壮士唄、それが川上音二郎による「オッペケペイ節」となって評判となり、さらに大正時代には唾蟬坊の「ブラブラ節」となり、又一方では早物語から生まれたというチョンガレ・チョボクレが見られ、祭文語りが持ち歩いたものが、浪花節への道を歩むことになる。そしてその基礎は子ども時代の昔話の語りにあったといえるのではないか。

## 5 小学校国語読本の昔話

昔話を見る目が、明治時代になって大きく変わってくる。教育の教材になったことである。それによってさらに、昔話は幼児のものになってしまったことである。いささか時代は後になるが、色刷りの講談社絵本が登場する。それを手にしない子はないといってもよいくらいである。ともかく明治五年に学制が制定され、教育をもって政府は国民国家の建設を強力に推進しようとすることになる。

江戸時代末に、半ば強制的にアメリカとの間に日米友好条約が締結された。だが外国人の裁判権を持たない不平等条約であった。主権を持つ日本、平等な条約にするには、まずヨーロッパ文明を受容することからと、欧化政策をもって大国と肩を並べることのできる近代化が急務であると考えられた。そのためには江戸時代の封建制度から脱皮し、文明化のために識字率を高め、国民意識を醸成することであった。だが江戸時代を生きてきた大人には、期待できな



かったから、いきおい子どもの教育に力を入れることになったといえよう。識字率を高めるために、さっそく国語読本が生まれることになるが、子どもが興味を持って習得できるようにするには、教材として昔話が見直されることだったのである。囲炉裏端で語られてきた昔話は格好な教材であったのであり、たとえば、検定期以前の明治十七年『小学読本』全五巻(若林虎三郎編纂、金港堂)には既に「亀とうさぎ」が掲載されている。

ちようどそのころには日本にやってくる外国人も多くなった。ヨーロッパ・アメリカの人々には日本人の生活そのものももちろんであるが、何といっても服装を始め、特に髪型は珍しいものだったろう。そうしたこともあつてか日本の昔話絵本が、土産物として登場することになった。しわをつけた紙に極彩色の絵を描き、長谷川武次郎の店である弘文社から明治十八年(一八八五)に「桃太郎」「舌切り雀」「猿蟹合戦」「花咲爺」「かちかち山」の五編が出版された。「ちりめん本」<sup>56</sup>といわれた。浮世絵師の描いたものは、繊細な線描は外国人に喜ばれたものであった。その評判にあやかつて次々に幅を広げ、「鼠の嫁入り」「こぶとり」「浦島太郎」「松山鏡」「海さち山さち」「俵の藤太」「鉢かづき」などから、さらに神話・伝説にまで入り込み、「日本昔話文庫」と呼ばれた。小学校国語読本に昔話が入ることに、このちりめん本は間接的に影響を与えることになったようである。翻訳者はチェンバレン、ハーンなどで、ドイツ語訳にはフロレンツなどが当たった。そのほかにもオランダ語訳、フランス語訳なども出たという。ちりめん本は細々ながら昭和まで見られ、外国人の教科書として採用されたとも言われる。やがて教科書検定期に入り、明治二十年には文部省による七巻本

の『尋常小学読本』が作成される。その巻一には「桃太郎」が見られ、巻四には「こぶとり」「大阪の蛙と京都の蛙」が載せられている。その後は改訂ごとに昔話が増えらるることになる。こうした中で、明治文壇に児童文学という分野を開いたとされる巖谷小波が昔話に登場し、まとも上げた『日本昔噺』が少年雑誌に連載されて、大評判をとり、少年少女だけでなく、大人の読者をも巻き込んで広がったようである。というのも評判を耳にして、文学者からも昔話を種にした作品が生み出され、夏目漱石の推奨もかちえた鈴木三重吉は「童心主義」をかかげて、昔話にも関心を示すことになる。それまでも尾崎紅葉が「鬼桃太郎」を書いたのは、明治二十四年であり、森桂園、石橋思案なども「桃太郎」に挑んでいる。

巖谷小波は『日本昔噺』の評判に気をよくし、ヨーロッパやその他の国の昔話を集めて、翻訳した(翻訳というより翻案といつてよいだろう)のが『世界昔噺』で、これも大評判となった。ともかく囲炉裏端で耳にしたものがいくつあつて、親しまれやすかつたのである。中にはグリム童話の翻訳も見られるようになり、大幅に昔話の世界が大きくなったといえよう。

新興出版社として名をなした博文館の第二代目、大橋新太郎からの誘いで、『少年世界』に「桃太郎」を掲載し、やがてその主筆として、毎号昔話を書き、それが後に『日本昔噺』としてまとめられることになるが、その二十四編は「桃太郎、玉の井、猿蟹合戦、松山鏡、花咲爺、大江山、舌切雀、俵藤太、かちかち山、瘤取り、物臭太郎、文福茶釜、八頭の大蛇、兎と鰐、羅生門、猿と海月、安達ヶ原、浦島太郎、一寸法師、金太郎、雲雀山、猫の草紙、牛若丸、鼠の嫁入り」で、昔話・伝説・歴史物語など、特別な配慮がみられ

ないことを考えれば、興にのって書かれたものといえるかもしれない。

それまでの、耳で聞く昔話を、目で見る目新しさもあつたらうし、政府の識字率の向上にも押されて広がった面も否定できない。本来の「語り」による昔話は、動詞の文学、出来事を骨太につないで物語が出来上がっているといえるが、小波の昔話は叙景が事細かに描かれ、語りを比較すれば、ある面では煩わしいと思われるほど、心理描写などが入ってくるようになったのは、坪内逍遙、二葉亭四迷などのヨーロッパ文学の翻訳の影響ともいえよう。

## 6 読む昔話

そうしたこともあって、大正時代に教養主義が広がることになったが、子育ての基本は「良妻賢母」の声が高くなった。そんな中で小波の昔話を読んで聞かせることが、推奨されたのである。この主張の第一人者は下田歌子で、その著『家庭』という六百頁に及ぶ大冊の中で、第七章「育児と家庭教育」を置き、御伽噺を取り上げて、「賢母は（お伽噺を）注意を払って読みかせるのはよいが、十分選択する目をもつていなければならぬ」といいながら、小波の日本昔話は修身・作法に大変よいものといっている。そこでは「語りとしての昔話」は意識されておらず、昔話はまさに「読む昔話」となってしまうといえる。

今、振り返って、小波の「花咲爺」の冒頭を見てみたい。

むかしむかしまづある処に、爺さんと婆さんがありました

とき。わずかばかりの畠を持って、細くも活計を立てて居りましたが、悲しい事には兩人の間に、子というものがありません。其処でせめてもの心遣いに、一匹の犬を飼ひ、此をば四郎と名づけまして、わが児も同然に、蝶よ花よと可愛がつて居りました。

猫は三年の恩を三日で忘れ、犬は三日の恩を三年忘れぬとやら、同じ畜生の中でも、犬ほど義を知る獣がありますまい。されば此の四郎も、お爺さんとお婆さんが、わが児も同然に可愛がつてくれる。其恩義に感じまして、誠によく兩人になつき、昼はお爺さんが山へ柴刈りに行くお供、夜はまた家、畠の見張り番、骨を惜しまず忠義を尽くしますから、兩人はますます可愛がつまして、甘味い物のある時は、自分達は喰べずとも、まづこの四郎に遣つて、其嬉しがる顔を見るのを、無上の快樂として居りました。

すると又其隣家にも、矢張り爺さんと婆さんが住んで居りました。此は又至て良くない奴で、常から四郎をば憎がり、一寸勝手口を覗いたといつては、はや肴でも奪られた様に、声を揚げて怒鳴りつけ、時とする和有合ふ薪などを投げつけて、ちんばにさせる事もありました。

或日の事で、四郎は何思つたか、裏の畠の方で頻りに吠えておりますから、例の爺さんは、また烏でも来たのであろうと、庭から下りて行って見ますと、四郎はさも嬉しそうに、爺さんに飛びつきましたが、其尻裾をくわえて、畠の隅へ連れて行き、其処にある大きな榎樹のしたの土をしきりに搔いて居ります。爺さんは何の事だか解らないから、「ヤイ四郎如何したの

だ?」といいますと、四郎は尚も土の香りを嗅ぎながら、「ここ掘れわんわんわん、ここ掘れわんわんわん」と啼いております。

昔話語りの「花咲爺」は、山形県などの東北地方ではもっぱら「くいごこむかし」として伝承され、一切の心理描写、叙景描写は見られない簡潔なもので、しかもこちらの爺婆はマメ爺、婆なのに、隣爺、婆はヘヤミ爺、婆として登場する。語りで伝承されたそれは次のように始まる。

むかしあつたけど。或る村さ、爺様、婆様、いでやつたど。

爺様は山さ柴切りに、婆様は川さ洗濯に行つたけど。そしたら川上から、赤い小箱と白い小箱ながつて来たんだけど。

赤い小箱こつちゃこい

白い小箱そつちゃ行け

そしたら赤い小箱はニコニコとこつちゃ流れてきたど。白い小箱はメクメク泣きながらそつちをながれていったど。

赤い小箱拾つて開けてみれば、クイゴコ(子犬)が入つていたけど。家には子どもいなかつたから、クイゴコにあかいトト(魚)かけて、ご飯を喰わせて育てたど。

ある日、クイゴコは爺・婆にいうたど。

じんちゃものれ クエンクエン クエン

ばんちゃものれ クエンクエン クエン

かますも鉄もつけれ クエンクエン クエン

小波の文は明らかに読む昔話で、情景描写、心理描写が多く、なによりも冗漫であり、興をそいでしまいかねない。語りのそれは五歳前後の子ども相手に語つたものであり、語りの場合では聞き手の年齢なり、その折りの条件で、語り自体も変わることもあり、長短さえ左右されることもある。また聞き手の耳に入りやすくするために歌うように語ることもあり、「赤い小箱、こつちゃこい」等はまさにそれに当たろう。さらにいえば、可愛がつて育てている子犬が、爺や婆によつてくるのに、「ワンワン」とは吠えることはなく、「クンクン」と寄つてくるので、子犬のことを「クイゴコ」と呼ぶのだというご教示があつたのには、なるほどとうなずいたものである。しかも語りでは、絶えず聞き手の反応を見ながら語り継いでゆく上に幼児には、相槌に「オットウ」とか「ハート」「サンスケ」などと受け答える事を求めることも多く見られた。小波の昔話ではそうした意識は全然見られず、「聞く」から「読む」へ大きく転換したものと見えよう。

## 7 国語読本

やがて小波は文部省の図書課嘱託として、国定教科書の編纂に当たつたのは、明治三十九年のことである。明治四十三年の『尋常小学読本』の昔話は小波自ら書いたものであつたともいう。それ以降大正七年、昭和八年に改訂されるが、国語読本の中の昔話はほぼ定着することになったといえる。しかも、昔話を輪切りにして一年には何、二年には何といったかたちに定着することになったと見てよい。

昭和八年の文部省の『国定国語教科書』全六巻では、次のようになっている。

巻一 「シタキリスズメ」「モモタロウ」

巻二 「サルトカニ」「ネズミノヨメイリ」「コブトリ」「花サカヂヂイ」

巻三 「一寸ボウシ」「かちかち山」「浦島太郎」

巻四 「かぐやひめ」「大江山」

巻五、六には神話を含めて、歴史物語になって、昔話は収録されない。明らかに教育の中では昔話は幼児のものという観念を植え付けてしまうことになったということであろう。にもかかわらず、国の津々浦々にいたるまで、昔話が知れ渡ることになったといえる。しかし教育の中に取り入れられることによって、問題がないわけではない。昔話のモチーフ・話型は教科書のものに限られ、いわゆるサブタイプの昔話は除外され、認められなくなったし、それが語りにも影響を与えることになったのではなからうか。

もつとも語りの文化から、読む文化への移行はすでに江戸時代に生まれていたともいえるし、見る昔話も現れたといえる。前述したが、柳亭種彦の『用捨箱』によれば、初春の初読みには『御伽草子』の「文正さうし」が使われていたとある。寺子屋に通っている娘が家人を集めて、大声で読んでやるのを楽しんだといわれるが、やがて明治になって二葉亭四迷がツルゲネフの『あいびき』を翻訳したが、恋愛の状況は声を立てて読むのには抵抗があるものになっていただろう。声を出して恋愛の心理を読むのははずかしいことであっ

たろう。

一つ加えておかなければならないことがある。昔話の語りを聞いて、印象に残るのはもちろん大筋でのモチーフへの興味もあるが、今まであまり注目されてこなかったへ歌う部分である。童歌との類似の研究なども見られるが、歌う部分のなかには話型を成立させているモチーフが含まれておらず、わらべうたを語りの中に加えたようなものがないわけではないが、中には唄の部分に重要な昔話を成立させるモチーフの入っているものもあることも忘れることができない。

「山田白滝」(大成二三三)では、三人の下男がそれぞれほしいものをかなえてやると、旦那様から言われる。一人はたらふくご馳走を食べたいという。次の一人は榊ハス三杯の小判が欲しいという。ところが三人目の下男は空蔵といい、旦那様の娘が欲しいという。旦那はこれだけは娘に聞かないことには答えられないといって、娘に問いかけると、歌詠みで娘を負かしたら嫁になるといふ。そこで娘が先ず歌を詠む。

白滝に心寄せたか山田の案山子

山田の稲も枯れそうだ

助けて呉れろちや白滝の山

すると空蔵はこう返す。

天より高く咲く花も

落ちりや空蔵の下になる

さすがの歌に娘の婿を空蔵が射止めたという話である。

まさに、旦那の娘の歌に対する返し歌は昔話語りのモチーフそのもので、単に返し歌を返したというだけでは、話型は成立しない。

同様のものに「瓜子織姫」でも、アマノジャクが爺婆の留守にやってきて、瓜子姫が機を織っているのを無理矢理ひきおろし、殺してしまい、姫の着物を身につけて、知らんぷりして、機に上がって織っている。

町から戻った爺婆が買ってきたトコロ(山芋)を出すと、皮もむかずに食べてしまう。変だなと思っていると、姫に化けたアマノジャクは、「皮は皮の葉、毛は毛の葉」といつて平気である。そして機を織っているが、その音は、姫の織るきれいな音「キーコパタン」という音に較べると、「ギーコ、バタン」と変な音である。

どうもおかしいと思っていると、そこに、どこからか飛んできた鳥が、庭の木の枝にとまって、鳴き出す。

瓜姫子の、のり機さ

アマノジャク、ぶちのつて

ギーコバタン

と鳴いているのだった。

やっぱり機を織っているのは姫でなくて、アマノジャクに違いないと知った爺は、鉈でもつてアマノジャクを殺して、荒地の下に埋めたので、萱の根っこは今も赤いのだという。

また別の「瓜子織姫」では、アマノジャクの死体をずるずる引きずっていつて畑に捨てたので、そばの根が赤くなったのだともいう。

昔話の中のへ歌う部分<sup>16</sup>は、わらべうたも同様であるが、そのリズムとメロディは子どもの生活のリズムに重なり、記憶の中に蓄えられて、呼び戻すときの重大な手がかりになることは、地道な調査を通して、昔話の収集に当たってくれている方が、指摘しておられることで、「花咲爺」を「くいこむかし」と呼ぶ東北地方などで

は、「赤い小箱こちやこいの話」といつて、語り手に思い出してもらったことを思い出す。

## 8 歌う昔話

そういった意味で、小学校唱歌<sup>16</sup>の中に昔話の唱歌が入っていたことも、国語読本の昔話とともに、昔話が国の隅々まで行き渡るのに大きな力になったといいつてよいだろう。人気の高かった「桃太郎」には二つの歌がある。

### 【歌1】

1番 桃太郎さん 桃太郎さん お腰につけた 黍<sup>きび</sup>団子 一つわたしにくださいな

2番 やりましょう やりましょう これから鬼の征伐に ついてゆくならやりましょう

(以下三番まで)

### 【歌2】

モモカラウマレタ モモタロウ キハヤサシクテ チカラモチ  
オニガシマヲバ ウタントテ イサンデイエヲ デカケタリ

人気の面では「花咲爺」も劣らないであろう。二つの歌詞をもつていた。

### 【歌1】

1番 裏の畑で ぼちがなく 正直じいさん 掘ったれば 大判  
小判が さくさくさくさくさく

2番 意地悪いさん ぼちかりて 裏の畑を 掘ったれば か  
わらや貝がら がらがらがら

【歌2】

1番 正直爺さん 灰まけば 野良も山も 花ざかり 殿様大そ  
うよろこんで ぢぢいに褒美を下される  
2番 意地悪爺が灰まけば 目鼻も口も 灰だらけ 殿様大そ  
う腹を立て ぢぢいに縄をかけられる

「浦島太郎」は五番まで有り、異界とはどんなところかを、描こうとしている点で、ユニークなものを持っていたといえる。

1番 昔々 浦島は 助けた亀につれられて 竜宮城に来てみれば 絵にも描けない美しさ  
2番 乙姫様のごちそうに たいやひらめの舞いおどり ただ珍しくおもしろく 月日の経つのも夢の中  
3番 遊びにあきて気がついて お暇乞もそこそこに 帰る途中のたのしみは 土産にもらった玉手箱  
4番 帰ってみればこはいかに 元居た家も村もなく 路に行きあふ人々は 顔も知らない者ばかり  
5番 心細さに蓋とれば あけてくやしき玉手箱 中からぱつと 白煙 たちまち太郎はおじいさん

「さるかに」は「早く芽を出せかきのたね、ださぬとはさみで、ちよんぎるぞ」の歌があり、「金太郎」は「マサカリカツイデ、キントロウ」、「一寸法師」では「ユビニタリナイ、イッスンホウシ、

チイサイカラダニ、オオキナノゾミ、オワンノフネニ、ハシノカイ、キョウハハルバル、ノボリユク」と歌われている。

そうした目で改めて昔話の語りを見ると、「動物昔話」「本格昔話」には、語りの中に歌う部分が入っており、中には昔話全編を歌うように語ったという例が、「牛方と山姥」に見られたという小国町の塚原名右衛門翁のご教示があった。その一部を「かちかち山」と「猿地藏」から取り上げてみたい。

「かちかち山」の冒頭、爺が山の畑に豆を蒔くと狸がやってくる。

(爺) 一粒撒いたら千粒になれ、二粒撒いたら二千粒になれ

(狸) 一粒撒いたらくつされろ、二粒撒いたらくつされろ、三粒撒いたら、おれあ喰う

「猿地藏」では、川端に眠っている爺様を猿どもは、地藏と思つて、川向こうの地藏堂に安置しようとして、爺様を担いで川を渡る。そのとき爺様は屁をひつてしまう。そのときの猿たちの歌である。

ぶつとたっじゃは何だ 「時の太鼓」  
臭いは何だ 「香の煙」

さがったは何だ 「延命の小袋」  
猿ふぐり濡らすとも、地藏ふぐりぬらすな

このような歌の部分は快く聞き手の中に入り込んで、定着するのに抵抗はないことだろう。それ以上にこうした語りの中の歌う部分は聞き手の状況、年齢や語りの座の雰囲気などの諸条件を勘案して考え出され、伝承に乗って今日まで語り継がれたものなのである。しかも語り手が作って聞き手に与えた歌というよりは、語り手と聞き手の共同で作られた歌と見なければならぬものだろう。

小学唱歌の本で昔話の歌の入ったものは、もちろん教材として、学齢を考慮して作詞作曲されたのに違いないが、語りの中の歌とは別個なものである。とはいいながら、メロディ・リズムは、国語読本の昔話よりはるかに記憶の中にしまい込まれて、蘇ってくるものらしい。資料として記しておけば、明治三十四年「幼年唱歌」には「猿蟹」「浦島太郎」、明治四十四年「尋常小学唱歌」(全六巻)には、「桃太郎」(一年)、「花咲翁」(一年)、「浦島太郎」(二年)、昭和七年『尋常小学唱歌』には「桃太郎」(一年)、「浦島太郎」(二年)がある。

あえて付け加えれば、国語読本に合わせて、学年配当をしたのであろうが、これによって昔話自体、幼児の教育素材にしてしまったというそしりは、免れないところであろう。

注

- (1) 『嬉遊笑覧』は、喜多村信節著、幕末文政の自序あり。百科全書的作品で「日本随筆別巻」(吉川弘文館)所収。
- (2) 吉田綱富(糠山と号す)『童子百物かたり』は、天保十二年の序があるが、五十話のみで、残りの五十話は未刊と思われる。
- (3) 赤本は、貞享の頃から出版され、子どもの小遣い銭で購入できた昔話の版本である。後に残った版本で青または黒い表紙のものも出る。目に付き易いように表紙を赤く刷ったので、赤本と呼んだ。
- (4) 戦国時代、織田信長はキリシタンを認めたので、キリシタン

大名も多く出たが、次の豊臣秀吉の時代に禁止した。

- (5) キリシタンの書を禁じたので、日本の僻地の話が本となって出版され、井原西鶴の『諸国はなし』はその代表ともいえ、やがて怪談に変わっていく。
- (6) 喜田川守貞『近世風俗志』(岩波文庫)
- (7) 『偽紫田舎源氏』は、『源氏物語』の江戸時代版と言え、パロディの代表作と言える。
- (8) 桃太郎の豪華本で、この本を持てば疱瘡に罹らないと評判になった。
- (9) 南北朝から室町時代にかけて、「能・狂言」は完成したが、嘉吉の乱、応仁の乱などで京都は荒れ、地方に豪族となった武士が出現して、城が出来上がり、京都で食えなくなった芸人が地方へ分散し、大道芸の時代となった。
- (10) 『人倫訓蒙図彙』(東洋文庫)。これには大道芸の絵も入っている。
- (11) 祭文は元来、神への言葉の芸であったが、浄瑠璃が説経節に代わって、義太夫の芝居小屋で演じて有名になり、芝居小屋で演ぜられるようになった。
- (12) 前掲(10)
- (13) 座頭をよく保護したのは南部藩・仙台藩で、ボサマと呼んだ。
- (14) 早物語は、「平家語り」の師匠に付いて、前座に弟子が演じた、早口で語る物語のことで、「芸」として独立したものはならなかった。「そりりや物語語り候」で始まるもので、何でも逆に語ることから、若者たちに喜ばれた。室町時代から見られるが、これを記録した人に菅江真澄がおり、東北地

方に残ったものが多い。青森では「ハイハラリンの物語」といった。山形県では真室川町の佐藤陸三氏が多く収集している。

- (15) 『ちりめん本と草双紙』（福生市郷土資料叢書、平成二年）
- (16) 小学校の唱歌も昔話の普及に力となった。